



写真2 1区断面 (東から)



写真3 6区断面 外堀底面検出状況 (東から)



写真4 3区・4区 近代石相溝検出状況 (北から)



写真5 8区断面 外堀底面検出状況 (東から)

姫路城城下町跡

—姫路城跡第348次発掘調査報告書—



報告書抄録

ふりがな	ひめじょうじょうかまちあと
書名	姫路城下町跡
副書名	姫路城跡第348次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第41集
編著者名	小栗 裕子
編者機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市西郡町坂元414番地1 TEL. (079) 252-3950
発行年月日	2016年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
姫路城下町跡	兵庫県姫路市 東家町7番1地	28201	020169	34度 49分 40秒	134度 41分 37秒	2015.12.8 ～ 2015.12.10	23.32㎡	店舗建築
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	調査番号	
姫路城下町跡	集落跡	江戸時代		外堀		陶磁器	20150390	

- 本書は、姫路市東家町7番1地に所在する姫路城下町跡(遺跡番号:020169)の発掘調査報告書である。
- 本発掘調査(調査番号:20150390)は、姫路市教育委員会が実施し、姫路市埋蔵文化財センター小栗裕子が担当した。
- 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて南緯北である。また、標高は東京湾平均海水準(1μ)を基準とした。
- 土層名は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所発刊「標準土色帳」(1999年度版)に準拠した。
- 報告書は、平成27年度に姫路市埋蔵文化財センターにて実施し、報告書の作成は小栗が担当した。
- 本報告書に關する遺構・写真・図面等は姫路市埋蔵文化財センターで保管している。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第41集
姫路城下町跡-姫路城跡第348次発掘調査報告書-

編集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市西郡町坂元414番地1
発行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田西丁1丁目5番地
発行日 平成28年(2016年)3月31日
印刷 富士高速印刷株式会社
〒679-4232 兵庫県姫路市林田町上伊勢982番地の3

2016

姫路市教育委員会

1. 調査に至る経緯と調査の位置

姫路市東駅前町8番1地において、店舗の建設工事が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城下町跡のうち、外曲輪の南部土塁および外堀に当たり(図1)、埋設構造物を撤去する際の土壌調査において外堀埋土を確認し、隣接する市道(内々環状東線)の歩道拡幅工事に伴う既往調査でも遺構を検出している(図2)。このため、事業者と委託契約を締結し、遺構に影響を及ぼす範囲を対象に本発掘調査を実施することとなった。

調査対象は基礎掘削範囲9ヶ所であり、調査面積は23.32㎡である(図3)。

2. 調査の成果

既存構造物による擾乱が比較的多く、現地表面から約0.7~1.1mの盛土を掘り下げた標高10.4~11.2m付近で遺構を検出した。調査地北側の1区では、幅0.45mの東西方向の溝状の落ちを確認した。しかし、調査範囲が狭小であり遺物も出土しなかったため、遺構であるか判別し難い。1区東側に設定した2区では現地表面から1.3mまで擾乱が及んでおり、その直下の標高10.4mで地山とみられる灰黄色円礫混じりシルト層を確認した。遺構は検出できなかった。

調査地中央付近に設定した3・4区では、東西方向の間知石組み及びその裏込めと考えられる河原石混じりの土層を検出した。この石組は3区では大半がコンクリート構造物に覆われ、平面での検出のみにとどまったが、4区では、断面観察により3石分を確認し、さらに下方に続いていることが判明した。5区は現土下層で外堀埋土とみられる土層を確認し、北側壁面では3・4区から続く間知石組みの石材を検出した。

調査地の南側に設定した6~9区では、盛土下層で外堀の埋土とみられる暗青灰色粘質土層(図4 断面図11・12層)を確認した。可能な限り堀底の検出に努め、6・7区では現地表面から2.8m、8区では2.1mで堀底とみられる砂層を確認した。外堀埋土からは、換付磁器(皿)、陶器(コンロ)、瓦などが出土した(写真1)。

3. まとめ

本調査では、1・2区で灰黄色砂礫混じりの地山、3~5区において間知石組みとその下層の外堀埋土、6~9区において外堀埋土と堀底を検出した。このうち、3~5区の間知石組みは、平成25年度、26年度に実施した市道(内々環状東線)の歩道拡幅工事に伴う姫路城跡第303次、315次発掘調査において検出した、外堀埋土上に築かれた近代石組み溝の南側壁にあたることと考えられる。今回は、北側壁は検出されなかったが、既往調査では、溝は上幅が2.4m、深さが最大で1.6mの規模であること、外堀の北岸ラインと石組み溝の北壁はほぼ同じか若干南であったこと、出土遺物から昭和初期には廃絶したことが判明している。これらの調査成果を総合すれば、1・2区と3~5区の間外堀の北岸が位置しており、1・2区は南部土塁の範囲内に位置する可能性が高い。

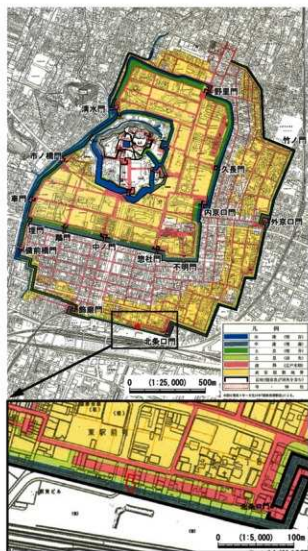


図1 調査位置図

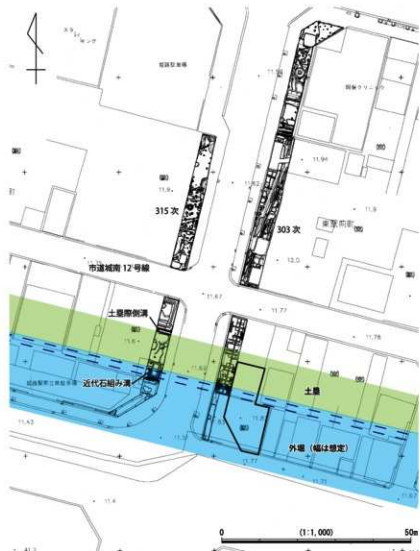


図2 調査区配置図(303次、315次との合成図)

また、『姫路城郭総堀管尺大間数図』に記載されている当該地付近での外堀の幅は、7間5尺(14.24m)であるが、第315次調査では外堀北岸からこの距離を超える位置でも南岸が検出されず、記載内容より幅が広いとの結果が報告されている。今回も調査地南端に設定した8区では、6・7区と比べて堀底が高くなっているものの、外堀の南岸は検出されず、既往調査成果との矛盾はなかった。



写真1 外堀 出土遺物

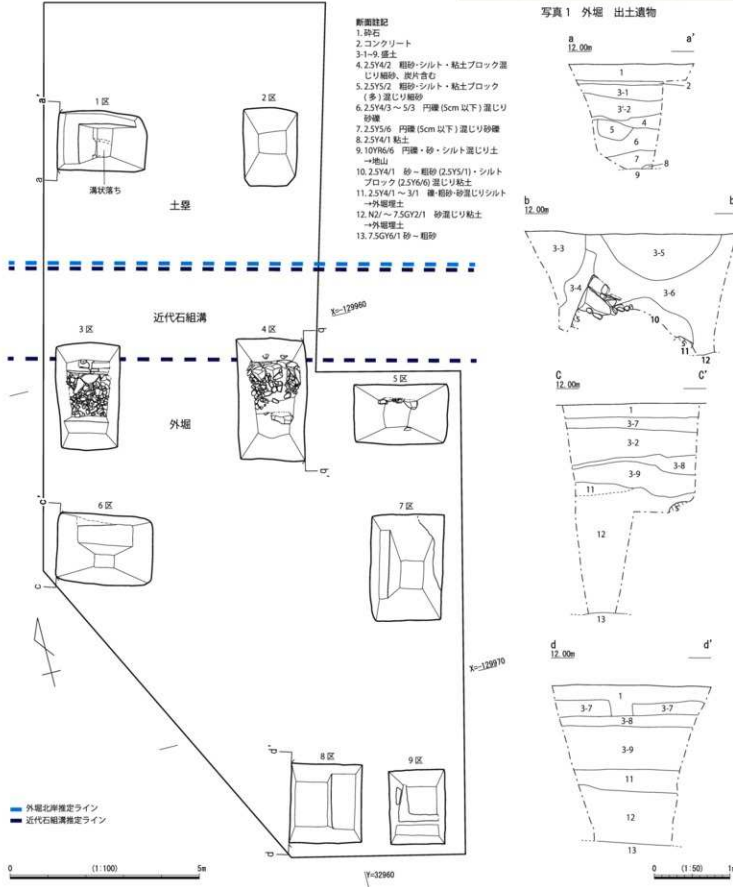


図3 調査区平面図

- 新調査記録
- 1. 崩石
 - 2. コンクリート
 - 3. 1-9 盛土
 - 4. 2.5Y4/2 粗砂・シルト・粘土ブロック混じり砂層、灰内粘土
 - 5. 2.5Y5/2 粗砂・シルト・粘土ブロック(砂)混じり砂層
 - 6. 2.5Y4/3 ~ 5/3 円礫(5cm以下)混じり砂層
 - 7. 2.2.5Y5/6 円礫(5cm以下)混じり砂層
 - 8. 2.5Y4/1 粘土
 - 9. 10YR6/6 円礫・砂・シルト混じり土→地山
 - 10. 2.5Y4/1 砂・粗砂(2.5Y5/1)・シルトブロック(2.5Y6/6)混じり粘土
 - 11. 2.5Y4/1 ~ 3/1 層間砂・砂混じりシルト→外堀埋土
 - 12. M/2 ~ 7.5Y2/1 砂混じり粘土
 - 13. 7.5Y6/1 砂・粗砂

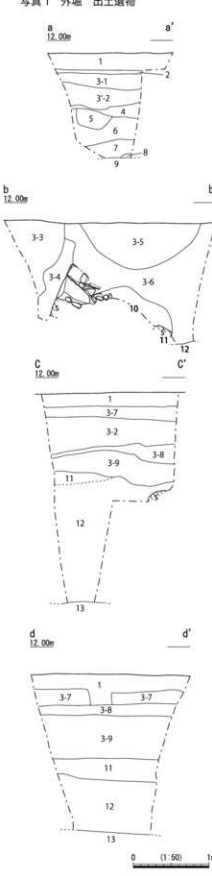


図4 調査区断面図